箱館戦争と高松凌雲の赤十字精神

中尾 仁彦 さん　箱館歴史散歩の会主宰、第１回 函館検定 上級試験合格、ＮＨＫラジオ「どどんと道南ラジオ」に月１回レギュラー出演中。

箱館戦争において「医者に敵も味方もない、あるのは患者だけだ」と日本最初に赤十字精神で治療にあたった高松凌雲。医師のあり方の本質を現在に伝えているのです。

現在の福岡県小郡市で、生まれた高松凌雲は、24 歳の時に江戸で蘭方医として著名だった石川桜所の門下に入ります。さらに大阪へ出て適塾に入塾し、蘭学者・医者であった緒方洪庵の指導を受けました。その後、一橋家に仕官したのをきっかけに、慶応 2（１８６６）年に 15 代将軍・徳川慶喜の奥詰医師を命ぜられます。医師は頭を丸めるのが通例だったが、奥詰医師になっても凌雲は有髪で馬にまたがり、新風を吹き込みます。慶応 3 年には、パリ万国博覧会に参加する徳川昭武に随行して渡仏。凌雲はそのままパリにとどまり、フランス語で「神の館」といわれる病院（兼医学校）で最新の外科・麻酔学の研究を続けます。さらに付属病院で富める者も貧しい者も同じ治療を受け、戦争にあっても敵味方関係なく同様に治療する人道精神を学びました。鳥羽伏見の戦いで幕府が大敗したという情報を受け取り、急遽帰国するも江戸城は新政府軍に引き渡され、行き場をなくした 33 歳の青年医師は、幕府の残存勢力である榎本軍に身を投じます。

箱館病院（正式名は箱館民政方病院）の頭取（病院長）に委嘱された凌雲は、榎本軍は混成軍で各隊には専属の漢方医がおり、最新の西洋医学を学んだ凌雲の指導に従うようには思えなかった。そのため「病院の運営には一切口出ししない」という条件で引き受けます。明治元（１８６８）年、五稜郭に榎本軍が無血占拠した際、置き去りにされた新政府軍の負傷兵 6 名を箱館病院に移して治療し、回復後に故郷へ送り返しています。当時、姿見坂付近にあった箱館病院は多数の負傷兵のため手狭になり、病院 2 棟を新築し、9 名の医者を束ねて救護活動に携わりました。

明治 2 年 5 月 11 日、新政府軍による箱館総攻撃の日、「箱館病院」に乱入してきた兵士を前に、「自分は医者だ。敵対するものではない。医者は生命を守る義務がある」と訴えました。身を挺して負傷者を守った凌雲の態度は、新政府軍の薩摩藩士・池田次郎兵衛や村橋久成（後に開拓使でビールを製造）らにも高く評価されました。これがきっかけで、12 日に和平交渉の斡旋を依頼され、事務長小野権之丞と連名で榎本に手紙を書き、結果的に 5 月 17 日の降伏をもたらし、多くの人命を救うこととなります。敵味方なく治療に当たった凌雲の行動は、日本赤十字の始まりとなり、よく言われる佐野常民の西南戦争より 10 年も早いのです。日本赤十字社の調べによると、箱館戦争で凌雲が治療した傷病者数は 1340 名、佐野常民が西南の役で取り扱った傷病者数 1429 名に匹敵します。

凌雲の思いとは裏腹に、悲劇に見舞われたのは、箱館病院の分院に当てられた高龍寺でした。5 月 11 日、津軽藩や松前藩兵士が寺に乱入し、医師・赤城信一らの嘆願も空しく、会津遊撃隊士他１０余名が惨殺され、さらに寺に放火をします。新政府軍にとって最大の汚点と言われます。明治 13 年、旧会津藩士が函館で１３回忌の追悼を行った際、高龍寺に「傷心惨目」の碑を建てて供養、現在も、函館福島県人会が慰霊祭を行っています。

箱館戦争は榎本軍の降伏で終了、生き残った幹部の中には、新政府に仕官する者も多く、凌雲は兵部省軍医に推挙したいという話を断わって、明治３年に浅草で開業医の道を選びます。明治１０年、佐野常民・大給恒らが創設した日本赤十字の前身と言える「博愛社」からの誘いに対して、「軍の医部が関与する赤十字などない」と断ります。明治 12 年、東京の開業医たちに呼びかけて「同愛社」を設立。これは、貧しい患者を治療する医師と、事業のために寄付する篤志家を組織化して、貧民施療にあたるもので、寄付者には、榎本武揚、勝海舟、徳川昭武などが名を連ねます。その事業は６０余の施養所となり、治療を受けた者の数は百万人を突破しました。最後まで徳川慶喜の家臣であり続けた凌雲は二君に使えずの倫理を貫き、大正 5 年に 81 歳で逝去。

昭和 40 年に凌雲の子孫の申し出により、凌雲がフランスから持ち帰った手術用器具や顕微鏡が市立函館博物館の五稜郭分館に預託・展示されました。東京大学医学部はその価値を高く評価し、強い譲渡の申し入れがあったそうです。数年前の分館廃止に伴い、本館での一部展示となりましたが、１４０年前の貴重な医学機器の見学を強くお勧めします。

高松凌雲　（市立函館博物館所蔵）